説教20201108テモテ二2:14-26 　讃美歌　246 249 262

「輝く器」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　言葉をあげつらわないように、と今日の聖書箇所の冒頭でパウロが注意を促していますが、今日の聖書箇所は、実際あげつらう人たちがいた生々しい現場を記しているようです。他人ごとではなく今ここに起こりつつある分裂の危機のようなことを記しているのです。私たちも、身につまされる問題を思い描きつつ今日の聖書箇所に聞いてまいりましょう。

　輝く器、と題しましたが、私たちは輝くもの、ことが大好きです。ある人達は輝く宝石を身に着けますし、ある人は輝く人生を精一杯生きようとします。

　しかし、その輝く、ということを問い詰めていきますと、そんなに話は単純ではないことがわかってきます。例えば、５才の子供と月の輝く夜に出かけたとします。子供が「月が光ってる」と感動して、言葉を投げかけたとき、「いや、あれは月が光っているんじゃなくて、太陽の光が月にあたって、その光が光ってるんだよ」という具合に説明しても、おそらく子供はチンプンカンプンでありましょう。又、原始人にも、このことはあまりわかっていなかったのではないでしょうか。つまり、今の世の中で科学的な知識を体系的に教えたられた人でないと、このような月の光にまつわる事実は了解されないのです。

　では、太陽はどうでしょうか。この世の中の雑談で「今日は太陽がさんさんと輝いてますね」と隣の人に問いかけたとします。隣人から「そうですね」という答えが返ってきて、その後、会話があらぬ方向に深まっていって、「いえいえ、あれは太陽が輝いているのではないのです。太陽を輝かせているのは私たちの創造主ですよ」と説明する成り行きになったとき、隣人がクリスチャンならばよいのですが、たいていの場合そうではありませんので、ここでも又、チンプンカンプンという状況が到来してしまいます。

　このように輝いているのはだれか、そして輝かされているのはだれか、という問題は、人間の目から見て、そんなに明瞭に見分けられることではないのです。例えば闇夜に輝く蛍の光や、暗い海の中に光る魚のことを考えてみましょう。まあ、そんなに厳密に輝いているのは誰なのか問い詰めなくてもいいのではないか、とも思われますが、それでも私たちは、自分たちの身につまされることに至っては、だれが輝いていて、誰が輝いてないかを比較してしまう罪な性格を持っていると思います。

　ではイエス様はどうでしょうか。イエス様のことを考えましょう。今日の１５節に「真理の言葉」とあります。これは、イエス様の身の上に起こった出来事のことです。つまり、イエス様が私たちの罪を受けて死に、そして三日目に復活して、私たち人間の内にあらわれました。この出来事は私たち人間をよみがえらせた輝かしい出来事です。真理の言葉の到来が私たちをよみがえらせ、輝かせるです。この輝かしい真理の言葉ですが、ここでは輝く主体は、だれの目にも明らかです。輝いているのはイエス様ご自身です。私たちではありません。イエス様がいれば周りは明るく輝かせられ、イエス様がいなくなれば周りは暗くなります。私たちの明暗はこのように全くイエス様に依存しているのです。

このように輝きの源はイエス様ご自身であるというこのことは私たちクリスチャンにとっては明々白々のことでありますが、私たちはこのことを正しく忠実に隣人に伝えていく必要があります。なぜならば、先ほどの太陽の輝きの話でも分かったように、世の人にとっては、光の源がどこであるのかは、未だ、考え中の問題であるからです。

　１６節に「俗悪な無駄話を避けなさい」とあります。俗悪な無駄話の内容は、ヒメナイやフィレトが「復活はもう起こった」と言いふらしていたということですが、これは彼らが、イエス様抜きで、イエス様によらないでも、もう私たちは復活した、といって喜んでいたといったことのようです。つまり輝きの源であるイエス様によらなくても私たちは自分自身で十分輝いているのだという姿勢です。いかがでしょうか。ヒメナイやフィレトのことを思いますと、彼らが決して特異な主張をする人物ではなくて、今、この世の中に在ってキリストを信じない人々と、共通点を持った人物であることがわかります。今、この世の中では、科学も発達しているし、イエス様によらなくても、人間は十分、自分たちだけで輝いていけるという罪な考え方が、今の世の中に蔓延していないでしょうか。

　ですから私たちクリスチャンは２４節に在りますように「すべての人に柔和に接し、教えることが出来、よく忍び、反抗するものを、やさしく教え導かねば」ならないのです。

　ところで、パウロ自身もこの姿勢を実践し続けたのであります。皆さん聖書で「器」と聞きますと、まず「土の器」を思い浮かべないでしょうか。:コリントの信徒への手紙二の4章7節、新約聖書329ページになりますが、「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」とあります。偉大な力は神のものであって、わたしたちから出たものでないといわれています。輝きの源は神のものであって、私たちから出たものではないのです。今日の聖書箇所ではパウロは、わざと金や銀の器を引き合いに出していますが、パウロは自分のことを「土の器」だと思っていたと思います。なぜならパウロは回心前はキリストの教会を迫害していた者ですし、決して自分自身を立派で無垢な人物であると自己評価出来なかった思われるからです。彼は土の器、しかも欠けの多い器であり、又それ故に、うちにあるキリストからの輝きを発することのできる人物だったと思います。

　２０節を読みますと、パウロは「大きな家」すなわちこれは「神の国」のことですが、その神の国のありさまをよく承知していました。大きな家においては、金や銀の器も、普通の器もその置き所をちゃんと用意されているのです。そこでは金や銀の輝きもたいしたことではありません。むしろ、大きな家において、居場所が用意されていることのほうが大切です。

　今日の聖書箇所は、私たちが真理の言葉を正しく忠実に伝えるのにまつわる、実際的な困難や妨害を指摘しています。そして、ミイラ取りがミイラになるではないですが、私たちクリスチャンが真理の言葉を述べ伝えるときに、私たち自身が、世の輝かしさに幻惑されて、輝きの源がイエス様にこそあるということを忘れてしまう危険性を指摘しているように思います。いかがでしょうか、私たちは自分自身こそ輝く金や銀の器でありたいという誘惑からなかなか自由になれないのではないでしょうか。

　そんな時は、ぜひパウロのことを思い起こしていただきたいと思います。彼は、自分が土の器であることに誇りを持っていました。欠けの多い土の器こそ、イエス様の輝きを輝かすことが出来、死に至る自分自身を退かすことが出来ると知っていたからです。さらに神の国においては、金や銀や土の区別もないということを彼は知っておりましたので、彼は安心して、土の器であり続けることが出来ました。

　そんなパウロが今日の聖書箇所においては、わざわざ金や銀の器の話を持ち出してきました。そして２１節の「だから、今述べた諸悪から自分を清める人は、貴いことに用いられる器になり、聖なるもの、主人に役立つもの、あらゆる善い業のために備えられたものとなるのです。」ということを、軽く読んでしまったら、あたかも自分自身が、金や銀の器になりなさいというお勧めだけに終わってしまうのです。

　確かに、主人に役立つものとなるために、あなたは金や銀の器となれという勧告は、間違っていませんし、今の世の中においても、人々に受け入れられやすい物言いだと思います。なぜならば、人々は金や銀などの輝くもの、光物が好きですし、それを目指してそれぞれに一生懸命であるからです。ですからあなたは金や銀の器となれ、という勧告は、それを聞いた人の内側にすんなりと入っていくことでしょう。ここで最初から、あなたは土の器となれ、とお勧めするのは、それは好ましいことではありましょうが、人々の受け入れ度は、少々劣ってしまうでしょう。

　ここにパウロの伝道の進め方の工夫が見られます。彼はその場その時に合わせて物の言い方を工夫したのだと思います。彼は「反抗するものを、やさしく教え導いた」のです。

　ところで、なぜ、パウロは、このようにその場その時に合わせて、ふさわしい物言いを繰り出すことが出来たのでしょうか。

それは彼のイエス様への確信に基づいています。真理の言葉であるイエス様は、私たちの罪を受けて死に、そして三日目に復活して、私たち人間の内にあらわれたという確信です。イエス様がいなければ輝きはなく、イエス様によって輝きがやってきたという確信です。回心前のパウロは自分達こそ金や銀の輝く器だと思っていました。そして自分たちを輝かせようと考えて、必死になってキリストの教会を亡き者にしようとしていたのです。そのパウロにイエス様は目を止められました。イエス様はこういわれたかもしれません。「パウロよ、あなたは必死になって輝きの源である私を迫害しているが、それは本末転倒であるよ。あなたは自分が光を発する器であるという風に誤解をしている。」と。そののちパウロは一時的に目が見えなくされましたが、この期間は、パウロが本当の光の源を確かめるための試練の時となったでありましょう。

　このような試練を経て、パウロは輝きの源であるイエス様を確信するように替えられたのです。

　真理の言葉、イエス様は紛れもない真理です。輝きの源はイエス様であって、決して私たちではありません。私たちが金や銀の器であったとしても、それを輝かせているのはイエス様です。この紛れもない真理は、イエス様とイエス様を信じる私たちによって証せられていくものです。

　さて、こんな紛れもない真理をなぜわかってくれないのか、と私たちはやきもきするかもしれませんがその必要はありません、

私たちのなすべきことはただ一つ、輝きの源であるイエス様を確信することです。そして、私たち自身はかけの多い土の器であり、その土の器は、神の国での居場所をすでに保証されていると信じることです。

このような信仰に基づけば、私たちは、私たちの伝道においてミイラ取りがミイラになることなく、金や銀の話もすることが出来るようになるでしょう。どんな場所に赴いても真理の言葉であるイエス様のことを、その時と場所に合わせて証していくことが出来るようになるでしょう。今日の聖書箇所の最後26節「こうして彼らは、悪魔に生け捕りにされてその意のままになっていても、いつか目覚めてその罠から逃れるようになるでしょう。」には、正義から見放されたような人物に対するパウロのやさしい態度がにじみ出ています。

私たちは、輝きの源であるイエス様への確信によって、このような柔和でやさしい態度で神の国の伝道を進めていくことが出来るのです。

お祈りいたします。

天に居ます私たちの父なる神様、この主日に兄弟姉妹を集められともにあなたを礼拝賛美することが出来ますことに感謝いたします。

季節は収穫の秋となり、山々は色づいてきました。その一つ一つの恵みを私たちが受け入れ味わうものとさせてください。あなたによって輝かされていることを喜ぶことが出来ますように。

そして、この世の様々な苦難をもあなたが配置なさったものです。どうか、私たちがその苦難を受け入れつつ、御心により頼んで歩んでいくことが出来ますように。どうか私たちをお守りください。

私たちは聖霊降臨ののちの日々を歩んでおりますが、どうか聖霊によって私たちが満たされ、私たちを統治してくださいますように。悪しき霊より私たちをお守りください。

アドベントの時が近づいてまいりました。私たちがあなたをほめたたえる歌声を高らかに響かせることが出来ますように

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配していられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によってお願いいたします。